

野上彌生子の評伝を読んで

私は、野上彌生子が書いたものをたくさん読んでいたわけではなく、代表作とされる「迷路」と「秀吉と利休」を読んだだけだ。しかし、とくに「迷路」は20代で初めて読んで以来2度か3度読んだ。最初から不思議に思っていたのは、野上彌生子という作家が、何故これほどスケールの大きな小説を書けたのかということだ。また、女性には扱いにくいだろうと思われる場面の描写も念いりに書き込まれているのだ。

「迷路」で描かれている人物は、戦前・戦中の暗い時代に生きた、若いインテリたち、華族や上流階級から下層階級に至る各階層の男女（当時の日本では、今よりも社会の階層がはっきりしていた）、地方都市の人々などで、まことに多彩だ。物語は、主として東京と彌生子の出身地である大分県臼杵をモデルにした小都市で展開するが、他の場所も登場する。また、中国戦線での日本陸軍の内部や戦闘場面の描写もある。

最近出版された岩橋邦枝著「評伝 野上彌生子」（新潮社）は、上記の私の疑問にかなりの程度まで答えてくれるものだ。好著だと思う。野上彌生子は1885年5月6日に生まれ、1985年3月30日に死去した。享年99歳11箇月。大変な長寿で、しかも驚くべきことに最後まで小説を書き続けていた。彼女の評伝はこれまでも出たことがあるようだが、没後四半世紀を経て、この評伝が出たことは本当に良かったと思う。対象が野上彌生子ほどの作家となると、バ

ランスのとれた評伝を書くのに、それだけの年月を置くことは必要だったと思う。

この評伝を読むと、野上彌生子が大器晩成型の人だったことがよくわかるのだが、それを可能としたのは、彼女が他人から学ぶことに熱心で、かつ上手に学んだことだ。彼女は、若いときに、自分に大きな才がないと思っていたのだろう。だからこそ、他人から学ぶことによって、自分の知識を増やし、創作の手法を磨くことを貪欲に続けたのだ。もちろん、それは簡単にできることではなく、そのための環境づくりも必要だったが、彼女にはそれができた。運が良かったとも言えるし、運を掴むことにも長けていたとも言えるだろう。また、彼女は、利己的とも言えるほど自己中心主義を押し通す私の強さを持った人だった。この評伝を読むまで、私はこのような彌生子の実像を知らなかった。

上記の評伝は、主として彌生子自身の長年にわたる日記に基づいているので、作品を執筆したときの状況、日常生活、家族関係、他人との付き合いなどについて、この評伝に書かれていることは正確であると感じてよかろう。彼女の日記はあとで公表することを意識して書かれたものではないようだ。いろいろなことがあけすけに書いてある日記を、彌生子が自分の死後公表することを許していたことは、どう考えればよいのだろうか。作家として他人を研究することが当たり前になっていた彼女にとって、他人が自分を研究することは、自分自身の活動

の延長線上にあるものと捉えることができたのだろうか。

この評伝には、彌生子が中国戦線での日本陸軍の内部や戦闘場面について詳しく書いた理由が明らかにされている。全く偶然の縁で、彌生子は、兵士として中国戦線に従軍した人が途中まで書いて投げ出していた従軍経験に基づく小説の原稿を見せてもらっていたのだ。兵士だった人とは、のちに前衛彫刻家として名を成した飯田善国(いいた・よしくに、1923-2006)だ。土台になるものがあつたとはいえ、主人公の菅野省三が脱走を敢行する場面を書くことは、彌生子にとって大変だったようで、精魂をすり減らし、ノイローゼになりかかったという。夜中、眠りながら手にはペンを持ち続けているに等しい異常な生理状況が続いたことが日記に書かれている、彌生子が69歳から71歳のときのことだ。そこまでして書いたことには敬服するしかない。

私は、もちろん、野上彌生子本人を知っていたわけではない。しかし、3人いた彼女の息子のうち2人を知っていた(直接話したことはないが、本人を認識することはできた)。3人とも既に故人である。長男の素一(そいち)はイタリア語およびイタリア文学が専門で京大教授、次男の茂吉郎は理論物理学者で東大教養学部教授、三男の耀三は実験物理学者で東大理学部教授だった。

私が東大教養学部の学生だったとき、茂吉郎は物理学の教授で、彼が担当していたゼミナール(正規の科目ではなく、自由な形の授業で、希望者のみを対象とした)で、私は前期量子論を含む量子力学の初歩を教わった。当時の茂吉郎は40代半ばだったが、よく言えば穏やかだが、悪く言えば冴えない人という印象を受けた。また、私は数年間にわたって耀三と同じ教授会のメンバーだったが、この人から強い印象を受けたことはなかった。要するに、多士済々の物理学界では、茂吉郎も耀三も影の薄い存在でしかなかったと思う。

もうひとり、私が知っている彌生子の身内の人がいる。それは彌生子の孫で、この人をAと呼ぼう。Aは今年の3月まで埼玉大学教養学部の教授だった人だ。彌生子には左翼リベラルというイメージがあるが、Aは女性だが右翼保守派の論客で、産経新聞などによく彼女の書くものが掲載されていた。彼女の書いたもので私が読んだものは多くはないが、その内容に賛成できないものがあつたことは覚えている。

私が埼玉大学の学長を務めたのは、国立大学が法人化された2004年4月からの4年間だが、その最初の時期に、私は各学部教授会で私の方針を直接説明したことがあつた。ここでは具体的なことには触れないが、その方針に教養学部の教授たちが強く反発していることは事前に十分わかっていた。その教養学部教授会で、私が方針について説明したあと、質疑応答の時間になったとき、最初に勢いよく立ちあがって、反対意見を述べたのがAだった。このとき、Aは58歳か59歳だったはずだが、私がもっとずっと若い人のように感じたほど、彼女の話し方は感情的なもので、かつ無礼なところがあつた。発言内容は、言われなくても、私にはわかっていることに過ぎなかった。そのような反対意見に私が動じなかったのは言うまでもない。

このとき、私はその女性教員がAだと知っていたわけではなく、後になって、誰かがあの方がAだと教えてくれた。今回、上記の評伝を読んで、彌生子が、場合によって、利己的な行動に走って、まったく反省することのない人だったということに興味を覚えた。要するに、彌生子は全体の状況をきちんと把握してから行動するというタイプではなかつたのだ。今、私は、この彌生子の性格が孫に伝わつたのではないかと思っている。

上記の評伝によって、野上家の人々と私との間に細い繋がりがもうひとつあることを知った。彌生子の長男素一は旧制浦和高等学校の出身者なのだ。埼玉大学の前身は

旧制浦和高校と埼玉師範学校である。どの旧制高校でも出身者の結束は固かったようだが、浦和高校出身者もそうで、同校が消滅した後もずっと同窓会を開いていた。しかし、出席者が高齢化したため、2006年10月に最後の同窓会があった。この同窓会に私は招待されて出席した。野上素一は2001年に死去していたので、この同窓会に出席することはなかった。

野上彌生子の評伝は、私にいろいろなことを思い出させてくれた。（おわり）